

大学地理教育におけるN I E授業の開発（2） —地域創生をテーマとした単元「新聞記者になる」の実践化—

小原 友行*

Development of the Lesson Plan by NIE in University Geography Education (2):
The Case of Unit “Becoming a Newspaper Reporter”

Tomoyuki KOBARA*

ABSTRACT

This paper is an attempt to develop the lesson plan using Newspaper in Education (NIE) as the active-learning instructional method in geography education at the university level. The lesson model is based upon the unit “Becoming a Newspaper Reporter”. In this unit, students researched and interviewed the cases of community creation, and expressed them in articles, headings, photos, columns and editorials. Through this lesson, students were motivated to learn and realized deep learning.

キーワード：N I E（教育に新聞を）、アクティブ・ラーニング、地域創生、新聞記者

1. はじめに—本研究の目的と方法—

本研究の目的は、大学教育の課題でもある学生自身の主体的参加を可能にする授業方法の開発を、次2つの視点から行っていくことである。一つは、学生に将来への希望を与えることができるように、地域創生や自己実現に向けた地方紙の新聞記事を地域教材として取り上げることである。もう一つは、情報の背景を「クリティカルに読み解く」活動と、情報を「クリエイティブに生み出し発信する」活動の両面を行うN I E学習の活動を取り入れることである¹⁾。

具体的には、筆者が福山大学で担当している授業科目である「自然地理（1）」「同（2）」「人文地理（1）」「同（2）」「地誌」「教養ゼミ」「文化演習Ⅰ」「同Ⅱ」などの地理関連の授業において、里山・里海の再生をテーマとした地域創生の教材と、新聞を活用したアクティブ・ラーニング型のN I E学習方法を取り入れた単元を開発することである。また、それらを授業の場で実践・評価することを通して、大学の地理教育におけるN I E学習の有効性を吟味していきたい。

そこで、本稿においては、前述の研究目的を実現するための基礎的作業の一つとして、以下の4点について考察していきたい。第1に、なぜ大学の地理教育にN I Eを取り入れることが必要なのか、その意義を明らかにする。第2に、担当している地理科目の中で、この2年間に開発したN I E単元の概要を紹介する。第3に、本年度からゼミ生のために始めた科目「文化演習Ⅰ・Ⅱ」において、年間を通して備後地域の里山・里海創生をテーマに取り組んだ、授業「新聞記者になる」（2018年度前・後期）の全体像を紹介する。そして第4に、その成果・課題について考察する。

*大学教育センター兼任教員・人間文化学部教授

2. 大学地理教育にN I Eを取り入れる意義

大学の地理科目の教育にN I Eを取り入れることがなぜ必要なのか。その意義としては、次の3点を指摘することができよう。

第1は、大学生に「思考力・判断力・表現力」を育成することができることである。すなわち、「知る・わかるだけでなく、その背景を熟考し、それに対する自分なりの意見や考えを持ち、それを表現しながら社会への参加・参画を考えていく力」を育成することができることである。なぜなら、記者によって思考・判断・表現され、深い情報読解がなされた記事は、それ自体がすぐれた教材となるし、新聞づくりの活動は、それ自身が情報読解や思考・判断・表現の活動そのものであるからである。

N I Eのアイデンティティでもある「なぜ、どうして、もっと知りたい新聞で」「どうしたらいいの、みんなで考えよう新聞で」「意見や考えを伝えよう新聞で」は、大学教育においても重視する今日的な意義があると考えられる。

第2の意義は、大学教育の課題となっている学生自身の主体的参加を可能にするアクティブ・ラーニング型の授業方法を可能にすることである。社会の現実や課題の背景を「クリティカルに考える」活動や、情報を「クリエイティブに生み出す」活動を中心にしたN I E教育は、学生自身による主体的・対話的で深い学びを可能にすると考えられる。

そして第3の意義は、学生たちが「なぜ、どうして」「どうしたらよいか、もっといい方法はないのか」と問い続けていくことを通して、新聞記事の中に登場する社会をつくり、それを動かす人間に興味・関心を持ち、その中から希望を見つけ、それを届けようとする力を引き出すことができることである。N I E教育のもう一つの新たな意義とは、「希望の物語」を発見・創造・発信する力を育てることではなからうか。これは、卒業後の社会人としての生活にも必要不可欠なものであろう。

3. 「地域創生」(里山・里海の再生)をテーマにした地理科目におけるN I E単元の概要

2017・2018年度の2年間で福山大学における地理科目で取り組んだN I Eの事例としては、以下の①～⑥の単元がある。取り上げた新聞記事と学習の展開の概要を紹介すると、次の通りである²⁾。

① 連載記事「海に聞く 瀬戸内再生」(中国新聞)を取り上げた「自然地理(1)」(2017年前期)

ア 連載記事「海に聞く 瀬戸内再生」一覧

- 第1部 痩せる漁場 (2016年12月9日～26日)
- 第2部 小さな脅威 (2017年1月30日～2月4日)
- 第3部 分断の果て (2017年2月20日～25日)
- 第4部 酸性化の足音 (2017年3月19日～21日)
- 第5部 カキの未来は 米国編 (2017年4月23日～27日)
- 第6部 改正瀬戸内法の現実 (2017年6月1日～5日)
- 第7部 次代につなぐ (2017年6月13日～19日)
- 第8部 転換の時 (2017年6月22日～27日)

イ 授業の展開

- ◎導入：今日の朝刊を読み解こう。
 - ・本日の新聞の喜怒哀楽を読み解こう。
 - ・本日の新聞を坂本竜馬が読んだら、どの記事にどのような意見を持つのか。
- ◎「海に聞く 瀬戸内再生」の読解
 - ・なぜ今、瀬戸内再生が求められるのか。
 - ・中国新聞はなぜこのことを、今連載するのか。
- ◎「海に聞く 瀬戸内再生」の出前授業(永山啓一記者)
 - ・瀬戸内再生のための課題は何か。

- ・私たちはどうすればよいのか。
- ◎「瀬戸内再生」への意見や考えをもつ。
- ◎「はがき新聞」の作成と交流
- ・「瀬戸内再生」に関するはがき新聞を作成して意見や考えを提案する。

② 福山大学海洋生物資源研究所の水族館の新聞記事を活用した「自然地理（２）」（2017年後期）

ア 取り上げた新聞記事（中国新聞）

- ・「里海再生へこつこつ研究」（2017年1月8日）
- ・「タツノオトシゴ生態知って」（2017年4月25日）
- ・「海の生き物 表現無限大」（2017年7月13日）
- ・「水族館で学ぶ地魚干物」（2017年9月28日）
- ・「水槽ワンダフル」（2018年1月12日）

イ 授業の展開

- ◎福山大学内海生物資源研究所の水族館を取り上げた中国新聞記事の読解
- ◎有瀧真人所長による出前授業
- ◎水族館の見学
- ◎これらを踏まえた「コラム」の作成と発表

③ 連載記事「びんご多国籍時代」（中国新聞）を取り上げた「地誌」（2017年後期）

ア 連載記事「びんご多国籍時代」一覧

- 第1部 変化の波（2017年1月25日～31日）
- 第2部 実習の島（2017年2月28日～3月4日）
- 第3部 暮らし（2017年5月9日～13日）
- 第4部 活躍の場（2017年6月26日～7月1日）
- 第5部 支援の輪（2017年8月22日～26日）
- 第6部 ともに暮らす社会へ（2017年9月26日～30日）

イ 授業の展開

- ◎学習問題の発見
 - ・「備後地域で急速な多国籍化がなぜ生まれているのか？」「この課題を解決するにはどうすればよいか？」
- ◎連載記事「びんご多国籍時代」の読み解き
 - ・備後地域でなぜ外国人労働者が急速の増加してきたのか、どのような支援が求められてきているのか、その要因や背景について考える。
 - ・中国新聞備後本社は、なぜ「びんご多国籍時代」を本年度の長期連載記事としたのか。
- ◎「びんご多国籍時代」取材して～備後地域に見る多文化共生」の出前授業（高本友子記者）
- ◎「びんご多国籍時代」と呼ばれる地域社会において、多文化共生の社会を実現するためにはどうすればよいか、個人で考え、クラス全体で交流する。
- ◎多文化共生に向けての自分自身の意見や考えを「はがき新聞」にまとめてみよう。

④ 「再始動 福山駅前」を取り上げた「教養ゼミ」（2017年前期）での取り組み

ア 取り上げた新聞記事（中国新聞）

- ・「県東部の顔 にぎわい再生」（2017年1月6日）
- ・「再始動 福山駅前 活性化の道筋 上・中・下」（2017年6月6日～8日）

イ 授業の展開

- ◎中国新聞備後面の記事の読み解き
- ◎5名グループによる「再生アイデア」と「見出し」づくり
- ◎各グループの発表と交流

⑤ 「自然地理（1）」における里山再生に関する投稿（2018年前期）

ア 取り上げた新聞記事（中国新聞）

- ・「中国山地 人口50年前より49万人減」（2016年1月26日）
- ・「すすむ田園回帰の芽」（2018年6月30日）

イ 授業の展開

- ◎中国新聞記事の読み解き
- ◎中国山地の現状と課題の背景を考える。
- ◎中国山地における新たな価値の創造を目指した取り組みに気づく。
- ◎受講生による投稿「里山再生に向けて」

⑥ 「人文地理（1）」における「鞆の浦」日本遺産認定に関する地理探究（2018年前期）

ア 取り上げた新聞記事（中国新聞）

- ・「『鞆の浦日本遺産認定』（2018年5月25日）
- ・「鞆港 日本遺産の重み 上・下」（2018年5月25・26日）

イ 授業の展開

- ◎中国新聞の読み解き
- ◎受講生による地理探究
 - ・「鞆の浦」には福山市のブランドとなるどのような日本遺産となる観光資源があるのか、具体例を挙げて記述。
 - ・なぜそのような観光資源が守られてきたのか、その理由を地理的に説明。
 - ・「鞆の浦」のよさを守りながらさらに発展させていくためには、どのような新たな観光開発が考えられか、意見や考えを簡潔に論述。
- ◎ミニ研究報告書の作成

4. 「文化演習Ⅰ・Ⅱ」における授業「新聞記者になる」の実践化

(1) 「新聞記者になる」の全体計画

学部3年のゼミ生用の演習である「文化演習Ⅰ」（前期）と「文化演習Ⅱ」（後期）は、学生自身の卒業論文に向けての準備演習と、備後地域の里山・里海再生をテーマとした地域創生研究の2つの内容から構成されている。本研究に当たって開発したNIE授業「新聞記者になる」は、後者の内容として開発したものである。2018年の前期・後期に取り組んだ授業展開の全体像を示せば、以下の通りである。

【前期】

◎地元紙である中国新聞の地方面の下記の記事から、備後地域の希望がみられる記事を選択して紹介する。

- ① 「デニム新商品 CF活用」（中国新聞、2018年6月20日）
- ② 「備後畳表継承へ団体」（中国新聞、2018年5月1日）
- ③ 「やっさだるマン みんなで踊ろう」（中国新聞、2018年7月4日）
- ④ 「世羅らしさ 6次産品続々」（中国新聞、2017年1月6日）
- ⑤ 「廃校活用 島の魅力発信」（中国新聞、2018年4月25日）
- ⑥ 「青パイア 特産作物と味なタッグ」（中国新聞、2017年8月22日）
- ⑦ 「福山市立動物園40周年 小規模なんの インパクト大」（中国新聞、2018年1月6日）

◎新聞記事に掲載されている人物や施設を見学し、インタビューする。

（休耕田を活用した御調町のグリーンパイア、地元でアンネと出合える福山市のホロコースト記念館などを訪問）

◎中国新聞尾道支局の田中謙太郎記者の書いた記事を読む。

- ① 「小規模校の挑戦 地元からの進学増探る」（中国新聞、2018年4月2日）
- ② 「廃校活用 島の魅力発信」（中国新聞、2018年4月25日）など
- ◎支局を訪問し、新聞記者から取材の方法を聞き取る。（田中謙太郎記者への取材）
- ◎これまでの取材にもとづいて、「はがき新聞」を個人で作成する。

【後期】

- ◎「しまおこし新聞」づくり
 - ・地域貢献にチャレンジしている広島県立瀬戸田高等学校の「しまおこし事業部」の高校生を取材する。
 - ・5名で役割分担（表面記事、裏面記事、社説、コラム欄、写真）して、A4版裏表の「しまおこし新聞」（一次案）を作成する。
 - ・「しまおこし新聞」一次案を全員で検討し、改善案を話し合う。
 - ・改善案（二次案）を作成し、広島県立瀬戸田高等学校に送付し、改善意見を求める。
 - ・改善意見に基づいて、「しまおこし新聞」（三次案）を作成する。
 - ・見出しについて、中国新聞読者広報室に意見を求める³⁾。
 - ・意見を参考にしながら、「しまおこし新聞」（完成版）を作成し、瀬戸田高等学校および田中謙太郎記者に送付する⁴⁾。
- ◎各自の新聞づくり
 - ・各自が興味・関心をもった取材対象・地域を見つけ、新聞記者として取材する。
 - ・5名がそれぞれ各A4版裏表の新聞作成にチャレンジする⁵⁾。

（2）「新聞記者になる」の特色

「文化演習Ⅰ・Ⅱ」で取り組んだ授業「新聞記者になる」の特色は、大きく次の3点にまとめることができる。

第1の特色は、教材として取り上げた地方紙の地域面の記事が、すべて備後地域の人々による新たな魅力や価値を創造しようとする挑戦的な取り組みの事例であることである。このような新聞記事に出会うことによって、受講生の興味・関心や知的好奇心を喚起することができると思われる。

第2の特色は、授業の展開過程が、前期においても、後期においても、受講生が新聞記者となって、地域の人々に取材し、そこから得た情報を加工してストーリーを考え、それを新聞として発信していくというように組織していることである。

そして第3の特色は、新聞づくりの活動においては、受講生だけでの話し合いだけでなく、専門家である新聞記者への取材や見出しづくりの経験者からの専門的助言を受けながら記事を改善していくという、より深い対話的で協働的な学習活動を取り入れていることである。その意味では、アクティブ・ラーニング型のN I E 学習になっていると考えることができる。

5 おわりに—本研究の成果と課題—

以上紹介してきた、大学の地理科目の教育にN I E を取り入れた実践、特に「文化演習Ⅰ・Ⅱ」における授業「新聞記者になる」の成果としては、次の3点を指摘することができる。第1は、「新聞記者になる」という視点での学習方法は、大学教育においても、新聞を活用したアクティブ・ラーニング型の授業方法を可能にするという手ごたえを得ることができたことである。第2は、前期での地方紙地域面での新たな地域の価値を創造しようとする人々の挑戦する姿の記事の読解、記事に関連する人物や施設の取材と「はがき新聞」づくり、新聞記者へのインタビュー、後期での取材活動に基づく受講生が役割分担した新聞づくりと専門家の助言による見出しの改善、各自が独自の視点で取材を行い作成する地域創生新聞の作成といった、年間を通しての学習過程は、学習の深化という点で有効であったことである⁶⁾。そして第3は、学生自身が新聞記者として、テーマ設定、取材活動、背景の熟

考、新聞紙面への表現を行うという学習活動は、主体的・対話的で深い学びに発展する要素があり、受講生の興味・関心や学習意欲を喚起できたことである。

課題としては、次の3点を指摘することができる。第1は、90分という大学の1コマの時間的制約の中での取材活動では、近隣に取材対象が限定され、広がりをもたせることができなかったことである。第2は、学生自身が日常的に新聞に接する機会が少なく、新聞の読み方や新聞づくりの手順と方法を理解させるための事前授業が必要であったことである。そして第3は、5名のゼミ生全員がそろって調査を行うことは意外に難しく、クラブ活動・地域活動・アルバイトなどで土曜・日曜の活用も困難で、協働での取材や新聞づくりでは、一つにまとめるのに数週間の時間が必要だった。そのこともあり、異なる意見や考えの者が協働的に議論しながらより深い学びにするという点では、課題が残された。これらについては、今後の課題としたい。

【註】

- 1) 大学教育に取り入れるNIEの活動としては、大きく、情報の背景を「クリティカルに読み解く」活動と、情報を「クリエイティブに生み出し発信する」活動の両面を指摘することができる。前者については、「複数紙の1面や社説の読み比べ」「なぜと問い情報の背景を深く読む」「その日の新聞の喜怒哀楽を見つける」「平和や共生といったキーワードをもって読む」「問い(5W1H+1S)を見つけながら読む」「紙面作りにおける新聞社の価値判断を読み解く」「新聞記事から環境問題・平和問題などの今日的課題を考える新聞を活用した研究発表」「新聞記者による出前授業」などの活動がある。また、後者については、「切り抜き新聞」「取材体験活動(新聞記者になる)」「新聞の紙面や見出しづくり」「投稿などの活動」「社説やコラムにチャレンジ」「社説や投書欄を活用したディベートや討論」「新聞記事に対して自分の考え・意見を述べるNIEスピーチ」などが考えられる。大学教育において「思考力・判断力・表現力」を育成するためには、1単元の中で両者の活動を取り入れることが重要と考えられる。
- 2) ①の単元については、拙稿「大学地理教育におけるNIE授業の開発(1)～単元「瀬戸内再生」の場合～」福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第4号、2018.3で紹介している。また、③については、拙稿「地理的探究力を育成する大学地理教育の授業開発の新視点～単元『びんご多国籍時代』の場合～」『福山大学人間文化学部紀要』第18巻、2018.3で詳しく紹介している。
- 3) 「しまおこし新聞」(三次案)の主見出しは「瀬戸田の地域活性化のために：しまおこし事業部、地域発展に貢献」、コラムの見出しは「衰退の島を救う少年達」であった。中国新聞読者広報部からの助言は、主見出しは「いささか抽象的」、コラムの見出しは「重い」という指摘であった。
- 4) 受講生5名が協働で作成した「しまおこし新聞」(完成版)は、別紙1・2の通りである。
- 5) 受講生5名が各自で取材し作成した新聞の新聞名・主見出し・取材の主な問い、コラム記事、社説の一覧は、別紙3の通りである。
- 6) 別紙1・2の「しまおこし新聞」の記事内容や、別紙3の受講生により地域創生に関する新聞の社説やコラムの内容からもわかるように、取材内容を単にまとめるものでなく、地域の事象にかかわる人物の行為の意図や背景を熟考し、それに対する自分なりの意見や考えをつくり、それを表現しようとする工夫がみられる。その意味では、より深い学びを引き出すことを可能にしていると考えられる。

【追記】

本研究は、2018年度福山大学ブランディング事業研究プロジェクト経費の助成を受けて行った研究成果の一部である。また、2018年10月3、6日の福山大学公開講座において「新聞を活用した備後地域の新たな魅力・価値の再発見と発信」というテーマで講話した内容と、2018年11月24～25日に鹿児島大学で開催された日本NIE学会第15回鹿児島大会の自由研究発表第2分科会において「瀬戸内の里山・里海創生をテーマとした大学におけるNIE授業の開発—『新聞記者になる』の実践化—」として口頭発表した内容を再構成したものである。

別紙2 受講生作成の「しまおこし新聞」(完成版)の裏面

社説 「映え」で若者を掴め

現代の日本は、少子高齢化が進んでいるが、生口島でもかなりの少子高齢化が進んでいる。そんな生口島にある、瀬戸田高等学校は生徒の数が激減していき、今や全校生徒六十人程度である。

そんな中、瀬戸田高校では、二〇二二年に生口島・高根島に滞在する人を増やす目的として、「しまおこし事業部」を設立した。近年では、「巡り人」や「介護マップ」など地域に貢献する活動を行ってきたが、これは高齢者の方々の地域を維持するため、地域での暮らしをより良くするための取り組みや活動であり、島の発展というよりも、島の維持・問題解決を優先している。

そこで、情報化社会の進む日本で若者を呼び込むための提案としてSNSアプリである「Instagram」を活用した活動への取り組みを推薦する。なぜなら、昨年「インスタ映え」という言葉が流行語に選ばれたように、SNSアプリ「Instagram」を活用している若者は多い。小さな発信源であっても、全国のあらゆる人へと繋ぐことができる情報化社会のメリットを活用したい。そこで、生口島や高根島にある「インスタ映え」するようなスポットやスイーツなどを取り上げて、情報を発信し、拡散していくことで次第に島に若者が足を運び、若者集客へと繋がっていくのではないかと考えた。

若者の集客増加へ向けた取り組みを行い、若者男女が訪れる活気溢れる島を目指して、高校生と地域の方々が行った「しまおこし事業部」の今後を注目したい。

(林 智弥)

事業部のメンバー熱く語る

三年の矢野佑太さんは、来春から郵便局に就職が決まっている。今は世代交代をして、代表を二年の光石圭佑さんが務めており、矢野さんはメンバーとして部を支えている。

矢野さんが、しまおこし事業部に入部した理由は、「自分を変えるため。島の人になにかをできる人になりたい」と当時を振り返った。リーダーとしての思いもあり、「先輩方が創りあげてきたものをきちんと受け継ぐことはもちろん、自分たちが新しく始める活動も積極的に行っていきたい。そのためには一歩、二歩先を行って研究をおこなうてはいけない」と語る。

今は、今年の自然災害のこともあり、瀬戸田を観光の町として考え、島民だけでなく、観光客も含めて守るつもりで安全マップ・避難マップを作成中だという。そして、災害に対する知識をつけるために実際に被災地にも足を運び、活動を行った。

矢野さんは、来春から郵便局に就職するが、本当は大学進学を希望していた。ただ、家庭の事情で断念することになり、それなら島民の方と関わる機会が多い郵便局員になりたい、と思い夢を掴んだ。「しまおこし事業部に入ったことで、

町おこしに協力したい思いが強くなった。春からも郵便局員として、地域の方とのふれあいも多いので意見も聞いているながら町おこしに協力していきたい」と、これからも島のために活動をしていきたいという強い思いを語ってくれた。

他にも、「会社に入って島のためになるようなプロジェクトを立ち上げたい」と語る現代代表の光石さんや、

「高校の教師になって町おこしに協力したい」と語る一年の高田和奏さん、「日本一郷土を愛する学校を目指したい」と語る顧問を務めて八年目になる藤田玲生先生が、しまおこし事業部に在籍している。

一人ひとりが、それぞれの形で「島のために生きていきたい」という夢を持ち、活動を行っている瀬戸田高校のしまおこし事業部。今後彼らはどのような活動を「巡り人」「介護マップ」

玄関には数々の受賞記念の品が行い、島に活気をもたらしてくれるのか。今後の彼の活躍に期待したい。(景山梨央奈)

インタビューを終えて笑顔が

別紙3 受講生5名作成の地域創生新聞のテーマ・コラム・社説一覧

	新聞名・見出し・取材の主な問い	コラム	社説
A	<p>「ゲゲゲ新聞」</p> <p>◎ますますにぎわう水木しげるロード：リニューアルで旅人気上昇率アップ</p> <p>◎2018年7月に25周年をむかえた水木しげるロード。今や鳥取の顔といっても過言ではないくらい人気の観光地であるが、リニューアルに伴いさらなる盛り上がりを見せている。何故観光客は境港に集まるのか。その魅力はいったい何なのか。</p>	<p>「人口減少にも負けず」</p> <p>近年、全国では地域の過疎化が進み人口減少に悩んでいる。境港市も例外ではない。しかし、境港市は人口減少しつつも以前より盛り上がりを見せている。多くの地域が人口減少し衰退していく中、なぜ境港市は活性しつつあるのか。▲その理由は、妖怪の仕業ではなく、町全体の「愛」である。町全体が観光客を心から歓迎し、もてなす。それはまるで自分の故郷を思い出させるような感覚である。▲どこか懐かしさを感じさせてくれるその「愛」は観光客の心を温かくし、故郷に帰ってみたいかとさえ思わせる。故郷とはいつまで経っても大切な場所である。この機会に帰省するのもよいではないだろうか。</p>	<p>「映え」と「アイデア」</p> <p>現代の日本は、少子高齢化が進み、「地方の消滅」が現実味を帯びている。そのため、日本各地の地方では地域活性化に真剣に取り組む自治体が多い。しかし、地域活性化が成功している例は少なく、どこの地域も活性化のために頭を悩ませている。</p> <p>そこで、今回は地域活性化の成功例である境港市を紹介する。境港市は別名「妖怪の町」でも知られていて、町にはお店や交番、外灯や公園まで至る所に妖怪が存在する。妖怪の町の雰囲気作りや世界観を大切にしており、妖怪ファンだけではなく家族連れにも人気の場所である。そして、妖怪を活かしたスポットやグッズ、グルメやお土産なども工夫が凝らされていて「インスタ映え」をねらう若者が多く足を運んでいるのもにぎわいの理由である。</p> <p>また最近では、かに汁がでてくる蛇口も話題を呼んでいる。このように発想の転換で今までにはない、人が驚くようなことをして、さらに地元の特産物を用いた「アイデア」というのは話題にもなりやすい。</p> <p>これからの地域活性化は、「映え」と「アイデア」が重要となり、キーポイントになること間違いないだろう。</p>
B	<p>「尾道観光新聞」</p> <p>◎地元民の誇りになれるよう：尾道舞台の流行・引かれる訳</p> <p>◎平成31年1月15日に尾道市民会館にある観光課の岩田さんに取材へ行った。観光課は尾</p>	<p>「尾道に興味を持って貰えるよう」</p> <p>自分の地元を誇りに持っているだろうか。尾道の町に生まれた者達に尾道生まれであることに自信を持って貰う様、尾道の観光課は尾道をアピールし観光客を増やしている。尾道の観光課は尾道に観光客が来るよう日々、試行錯誤している。▲尾道はバラエティやCMでの撮影が時折行われる。そのオファーが来る度に責任を持って</p>	<p>行列を更にスムーズに</p> <p>尾道には日本人のみならず海外の方からも観光客が多く来る。目的はサイクリングや食事、神社・寺巡りなど様々である。</p> <p>尾道にはたくさんの飲食店があるが、よく見かけるのが飲食店に並び行列である。彼らは雨でも店に並び続けている。店側も多くの人を対応しなければならない中で一人一</p>

	<p>道が世間からの的になり観光客を増やすべく活動を行っている。尾道はなぜロケ地の舞台に選ばれるのか。そして、観光の効果というのはいかなるものなのか。</p>	<p>対応をしている。相手によっては無茶な依頼や急に撮影を中止する方もいたようだが尾道の事を世に知ってもらう為にロケ地使用のオファーが来れば相手の為、尾道の為に最後まで尽くす事で信頼を得て次へのオファーへと繋がっている。▲平成30年と29年で尾道を使用したメディアのコンテンツは合計107である。尚、WEB媒体・海外メディアで使用された数はそれぞれ9つである。これまでのメディアへの取り上げもあり尾道の観光客は随分増えた。▲尾道がロケ地に使われる訳は風景の良さだけではない。人が尾道に引き寄せられる様、観光課などで観光客が求めているサービスに対応をしているからである。尾道を発展させるために観光課などは住民・観光客が尾道を好きになって貰うために求めている事があればできるまで対応するようにしている。▲私も尾道市民として今後、更なる尾道の発展・人気が高まってくれる事を願いたい。</p>	<p>人に決済の対応をしていては大変である。</p> <p>そこで、キャッシュレスサービスを導入してみる提案である。少しでも客をスムーズに店へと流動できると考えられる。実際、海外では多くの国が活用している。相手の言語が伝わらなくても数字で理解が出来るため詰まることが減る上、外国人にも対応できるサービスを導入することでより多くのお金を落としてくれるようになり、サービスでの利便性で尾道の好感度も上がるのではないのかと考えられる。</p> <p>日本人のみならず海外の方へのサービスを行い、誰もがたくさんの店をスムーズに訪れられる尾道になる事を期待したい。</p>
C	<p>「神遊び新聞」</p> <p>◎一年間の感謝を込めて：年の瀬に舞う若者たち</p> <p>◎平成30年12月30日、31日と島根県江津市の大都神楽団へ取材を行った。古典の演目ばかりではなく、新たな演出などにも積極的に取り組んでいる当団体が、どのような公演を行っているのか。</p>	<p>「精神を受け継ぐ」</p> <p>2015年にNHKで放送された朝の連続テレビ小説「まれ」。能登半島を舞台に夢を追う父の影響で夢嫌いになった少女「希」がパティシエになり夢を追い続けるという物語が地元の人たちとともに描かれた。▲その中に石川県の伝統工芸品である「輪島塗」が登場する。輪島塗は何層の漆を塗り重ねて作られるが、下地に「地の粉」というものが塗られる。この「地の粉」というものは下地であり、ごまかそうと思えばごまかせる。しかし、ごまかせるからこそごまかしたらいけない、という職人魂がドラマの中にも描かれていた。▲地域に根付いた伝統芸能である「神楽」。近年さまざまな娯楽がある中で、地域に根付き若者も魅了されている。この伝統芸能を若者に受け継いでいくことが重要であるが、「型」を伝えていくだけではなく、「精</p>	<p>「聖地」を生み出す</p> <p>広島県、島根県で盛んに行われている「神楽」。秋祭りの奉納神楽が主体であるが、近年各種イベントやホール神楽など通年神楽を楽しめる環境にある。広島市街地でも毎週水曜日に神楽公演が行われ、外国人限定の神楽公演も行われている。</p> <p>しかし、神楽公演の数は増えている一方、観客の数は増えているかという疑問である。そのため、神楽の「聖地」を作り出すことを提案する。数ある神楽公演の中で「聖地」があることによって、神楽の普及、集客が図れると考えるからである。世の中には「聖地」と呼ばれるところがある。高校野球の聖地といえは甲子園球場であり、近年話題になっている競技かるたの聖地は近江神宮というようにそれぞれ「聖地」が存在する。また、アニメや映画の舞</p>

		<p>神」も受け継がれてきたため今に伝わっている。▲「神楽」や「輪島塗」のように、「精神」が受け継がれてきた地域の宝である伝統芸能や伝統工芸品が、これから先も受け継がれていくことを願いたい。</p>	<p>台となった場所を訪れる「聖地巡礼」という行為も流行している。このように神楽にも「聖地」を作り出すことによって、普及を行うことに限らず、「聖地巡礼」のように観客が増加することも見込める。</p> <p>数多くの集客増加へ向けてどのように取り組んでいくか。今後に期待したい。</p>
<p>D</p>	<p>「にじ新聞」 ◎明日の日が待ち遠しい一日を創造するために ◎平成 30 年 12 月 26 日、「虹の会」理事長を務める藤原博文氏へ取材を行った。障がい者の方々に対する熱い想いはどのように培われてきたのだろうか。</p>	<p>「障がい者の方々と地域の融合」 自分の熱い想いをたくさんの人々に届けるべく身を粉にして行動する者がいた。障がい者と街の融合をめざしてあらゆる活動を行う人物に出合った。▲広島県福山市高西町に本部を置く「虹の会」の理事長を務める藤原博文氏である。「虹の会」は、障がい者支援施設を運営しており、障がい者の方々へのより良い環境を提供している。▲障がい者支援の他にも、地域活性化のために、様々な取り組みのプランナーとして活動の輪を広げている。▲障がい者の方々と地域の方々が交流しながら、居心地の良い街となることを願いたい。</p>	<p>地域のために学生を 現代の日本は、都市化が進み、地域活性化を行う人達は少なくはないが、似たような取り組みが各地でされている。そんな中で、藤原氏は、障がい者支援施設を運営する「虹の会」を発足後、障がい者の方々と地域の方々が交流できる場をつくり、障がいを持った方々を中心とする街づくりに取り組んできたが、若者への理解が不十分である。</p> <p>そこで、松永には、大学生が多く住んでいるので、大学生を巻き込んで、障がい者の方々と交流できる祭りやスポーツ大会を行い、互いの感動を共有できることへ取り組むと面白いのではないだろうか。</p> <p>障がい者の方・地域住民・大学生の三者協力による地域活性化をめざし、その先頭に立つ藤原氏に今後も注目したい。</p>
<p>E</p>	<p>「空き家新聞」 ◎景観の保全、アイデンティティの確立：尾道空き家再生プロジェクト ◎平成 30 年 12 月 18 日、NPO 法人尾道空き家再生プロジェクトへ取材を行った。尾道空き家再生プロジェクトは平成 21 年 7 月に発足以降、尾道の斜面地や路地裏に取り残されてい</p>	<p>「再生を夢見る挑戦者」 旧市街地に取り残された空き家を尾道らしく活用しようと挑戦しつづけている者たちがいる。空き家問題は尾道だけではなく、全国的な社会問題として取り上げられています。空き家が増えること防災・衛生面で悪影響を及ぼすことはもちろんですが、使われずどこか寂しい街に見えてしまいます。そんな街に活気を取り戻すため、日々挑戦しつづけている法人組織がある。▲広島県尾道市三軒家町にある NPO 法人尾道空き家再生プロジェクトである。会員メンバーや賛助会員、尾道以外の会員たちと一緒に尾道ら</p>	<p>「SNS」を取り入れよう！ 現在日本では空き家が増え続けており、尾道でも空洞化と高齢化により空き家が数多く存在しています。そんな中、尾道空き家再生プロジェクトではそれらの空き家を再生し、新たな活用を模索し、活動を通じてほかにない尾道らしいまちづくりを行っていて短期滞在が可能な施設、空き家への居住等様々な用途で空き家が息を吹き返しています。</p> <p>しかしこの活動は、あくまで街の空き家自体の活用の問題解決が最優先されているものです。そこでわ</p>

<p>る空き家を再生するべく活動を行っている。尾道空き家再生プロジェクトはどのような活動を行っているのか。またどのように空き家を活用しているのか。</p>	<p>しい街を目指して活動する。目的としては、尾道の旧市街地・斜面地に残されている空き家を再生し新たな活用を模索していくことである。▲金銭の援助、現場作業など様々な形で会員が再生に取り組んでいる。尾道の空き家は活動対象にしている斜面地だけでも340件、商店街も含めると500件以上も存在している。そこでこのプロジェクトでは和の空間を生かした短期滞在が可能な貸家としてガウディハウスを作ったり、子育てママたちにむけて井戸端サロンも作られていて地元の人々や観光客など様々な層の人々に活用されている。▲使われてなかった空き家が息を吹き返すように活動しているプロジェクトの活動により良い成果がでることを願いたい。</p>	<p>たしは、空き家の空洞化の問題について深入りした「SNS」の活用を提案したい。なぜなら、情報社会が進む中で情報端末が普及しており、若者を中心に「SNS」を使った活動が増えてきているからです。</p> <p>{SNS}を上手く利用していくことが尾道らしい街をつくっていくには必要なことではないだろうか。尾道ならではの古風な街並みに興味を持ち、観光のほかにも「住んでみたい」と思うようなきっかけづくりになるのではないかと思います。</p> <p>空き家の空洞化の問題の解決として、尾道空き家再生プロジェクトの街の活性化活動に今後も注目していきたい。</p>
---	--	--